

## 専門家グループ制度について

### 1. 専門家グループの設置について

#### 1.1. 設立趣旨

平成9年河川法の改正により、治水・利水に加えて河川環境の整備と保全が目的となり、さらに河川整備計画の策定に際し、必要により学識経験者の意見を聴くとともに住民の意見を反映させることが定められました。

これを受けて平成13年2月に淀川水系流域委員会が設置され、2年10ヶ月間余りの審議を経て、「淀川水系河川整備計画基礎原案」についての意見書が発表されたところです。

本地域においては、生態系に配慮した琵琶湖の水位管理のあり方、流域から琵琶湖までの連続性回復、土砂動態及び水環境等の重要な課題があります。

本制度は、河川管理者が「淀川水系河川整備計画」に係わる調査及び事業を実施・検討する際等に、学識経験者から指導・助言を受けるためのものです。

#### 1.2. 専門家グループの構成

##### (1) アドバイザー会議

本制度の透明性を高めるとともに、河川環境の整備と保全について幅広く人材を集めるため、生態学・水理学・水環境学・農学・社会学の学識者5名によるアドバイザー会議を設置し、専門家グループメンバー構成やワーキンググループ設置、個別指導のための提案、助言を受けています。

専門家グループ アドバイザー会議名簿 (50音順)

専門分野	氏名	役職等
社会学	嘉田 由紀子	京都精華大学人文学部教授
生態学	川那部 浩哉	滋賀県立琵琶湖博物館館長
水理学	中川 博次	立命館大学理工学部教授
水環境学	中村 正久	滋賀県琵琶湖研究所所長
農学	三野 徹	京都大学大学院農学研究科教授

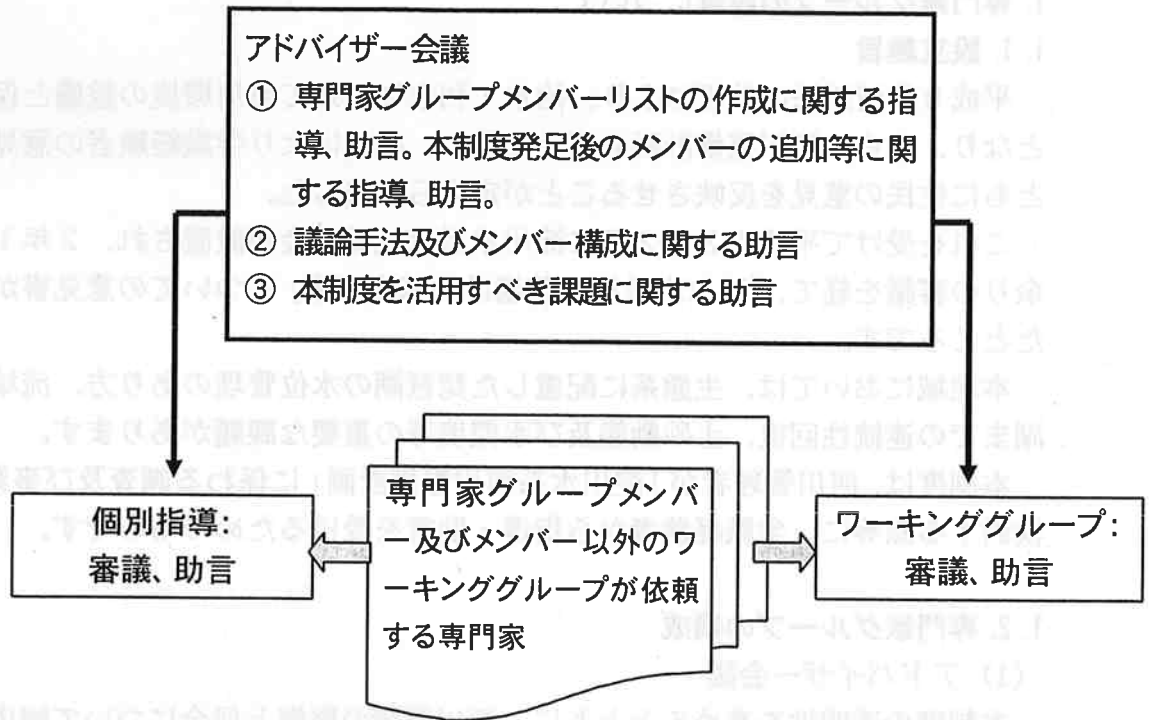
##### (2) ワーキンググループ (複数による審議)

ワーキンググループメンバーは、アドバイザー会議において、課題毎に専門家グループリストから選定し、構成されます。ただし、課題によっては、一時的に専門家グループリスト以外からの参加を求めることがあります。

また、会議の公開や関係資料及び結果の公表を行う事を原則とします。

### (3) 個別指導（単独メンバーによる審議）

個別指導メンバーは、アドバイザー会議において、課題毎に専門家グループリスト内外から選定します。



## 琵琶湖及び周辺河川環境に関する専門家グループのイメージ

### 2. 専門家グループ

専門家グループメンバーは、河川管理者からの相談に応じ、公平な立場のもと必要な指導、助言を行うものであり、アドバイザー会議の提案、助言を受け、河川管理者が選定しました。なお、選定に当たっては、以下のような条件を考慮しました。

#### <一人一人の条件>

- ① 課題解決のために必要な専門分野における高い学識をもっていること。
- ② 公的機関が設置した琵琶湖及び周辺河川に係わる委員会等へ参加するなど、豊富な実務の指導経験があること
- ③ 科学的な論拠に基づき、公正かつ客観的に判断を行えること

#### <全体構成等について>

- ① 全体構成は15～20名程度とします。
- ② 現地の近傍に居住または勤務する人を主体とします。
- ③ 若手研究者も入れます。

### 専門家グループメンバーリスト（50音順）

専門分野	氏名等	
環境経済	浅野 耕太	京都大学大学院地球環境学堂 助教授
景観	今森 光彦	写真家
河川(土砂)	江頭 進治	立命館大学理工学部 教授
水環境	熊谷 道夫	滋賀県琵琶湖研究所 総括研究員
環境計画	近藤 隆二郎	滋賀県立大学環境科学部 助教授
河川(水文)	竇 馨	京都大学防災研究所 教授
森林水文	谷 誠	京都大学大学院農学研究科 教授
漁業	戸田 直弘	滋賀県漁業協同組合連合会 元青年会長
生態(微生物)	永田 俊	京都大学生態学研究センター 教授
生態(陸水動物)	西野 麻知子	滋賀県琵琶湖研究所 総括研究員
農業	深田 富美男	農事組合法人 平林エコファーム 総務部長
環境工学	藤井 滋穂	京都大学附属環境質制御研究センター 教授
生態(魚類)	前畑 政善	滋賀県立琵琶湖博物館 総括学芸員
水環境	三田村 緒佐武	滋賀県立大学環境科学部 教授
農業土木	渡邊 紹裕	総合地球環境学研究所 教授

### 3. 水陸移行帯ワーキンググループの設置について

#### 3.1. 設置の目的

淀川河川整備計画基礎原案であげられた琵琶湖における課題等のうち、現在特に重要であると考えられる琵琶湖の望ましい水位変動も含めた水陸移行帯の環境改善に関するワーキンググループを「琵琶湖及び周辺河川環境に関する専門家グループ制度」のもとに設置し、専門家グループの指導・助言を受けながら、調査・検討を進めます。

### 水陸移行帯ワーキンググループメンバーリスト（50音順）

専門分野	氏名等	
環境経済	浅野 耕太	京都大学大学院地球環境学堂 助教授
景観	今森 光彦	写真家
社会学	嘉田 由紀子	京都精華大学人文学部 教授
河川(水文)	竇 馨	京都大学防災研究所 教授
漁業	戸田 直弘	滋賀県漁業協同組合連合会 元青年会長
生態(陸水動物)	西野 麻知子	滋賀県琵琶湖研究所 総括研究員
生態(魚類)	前畑 政善	滋賀県立琵琶湖博物館 総括学芸員

## 「水陸移行帯ワーキンググループ (WG)」の設置について

### 1. WG設置の目的

琵琶湖においては、淀川河川整備計画基礎原案にあるように、生態系に配慮した琵琶湖の水位管理のあり方、流域から琵琶湖までの連続性の回復、土砂動態、水環境等の課題がある。

そこでこれら課題のうち、現在特に重要であると考えている、琵琶湖の望ましい水位変動も含めた水陸移行帯の環境改善に関するワーキンググループ (WG) を「琵琶湖及び周辺河川環境に関する専門家グループ制度」におけるWGとして設置し、専門家グループの指導・助言を受けながら、調査・検討を進めるものとする。

WGの目的	琵琶湖の望ましい水位変動も含めた水陸移行帯の環境改善についての指導・助言
-------	--------------------------------------

### 2. WGの検討事項

琵琶湖の望ましい水位変動も含めた水陸移行帯の環境改善の検討を、図-1のように進める予定である。この検討の進め方や検討の内容、必要な調査計画等についてご指導・助言を受ける。



図-1 水陸移行帯環境改善検討フロー

### 3. 当面の議題

水陸移行帯の環境改善の検討を進めるにあたって必要な調査項目や、各調査の緊急度について指導・助言を受ける。

また、現在計画されている調査項目を表-1に示す。これらの調査項目についてご指導・助言を受ける。

表-1 必要調査項目

調査目的	調査事項	調査内容
琵琶湖及び集水域の現況把握	湖岸の標高・水深等の最新データ	沿岸深淺測量（1992年）の更新のため測量調査 →主要な魚卵場である「新旭、海老江、赤野井地区」は必要である。
流入河川の現況の把握	流入河川の河口地形・土砂動態等データ	調査項目：河道（平面図）、河積（縦横断面図）の変化、既設ダムの諸元、洪水調節、堆砂状況、水質等、計画ダムの諸元等 →流入河川の生物の連続性にとって河口域や河道の地形は重要であり、ニゴロブナ等の生息場やヨシ帯の形成には流入河川からの土砂供給量の把握が重要である。 （主要河川の土砂動態と河口域地形、ヨシ帯形成との関係等の実態、既設ダムの堆砂状況、下流のアーマーコート化等の実態のデータが不足）
内湖	内湖の生態情報	現存内湖の水利用、生物移動の連続性などの実態の調査 →内湖の情報はヨシ帯やニゴロブナ等の評価で重要となる。
沿岸帯の生物	沿岸帯生物の未調査項目	水位変動帯の貝類現存量の分布の実態把握調査 カイツブリのヨシ帯依存度および水位変動の関係把握調査
魚類産卵場	ニゴロブナ等魚類の産卵状況	主要な魚類産卵場である「新旭、海老江、赤野井地区」の魚類産卵状況調査 （H15に調査実施、H16に継続調査）
	ピワマス天然産卵の寄与度	主要河川のピワマス産卵状況調査
ニゴロブナ等在来種保全のための基礎情報の把握	在来種的生活史を把握するための課題点の解明	在来種的生活史の不明点の調査 →調査項目の選定リスト ・仔稚魚育成場（ヨシ帯）の水質・流動特性・土壌等の把握 ・主要魚種の成長曲線（標識放流、年齢査定）、体長と孕卵数の関係、水温と孵化日数の関係、食性、カワウの補食圧等 ・主要魚種の捕食量・補食圧の把握（餌選択指数、カワウ・外来魚等の捕食圧の定量化） ・ホンモロコ仔稚魚の環境選考試験等

水陸移行帯ワーキンググループ 今後のスケジュール(案)

		H16				
		3月	4月	5月	6月	～
		H15	12月	1月	2月	3月
工程		◆第1回水陸移行帯WG (3/30)		◆第2回水陸移行帯WG		◆水陸移行帯WG
議題		◎水位変動と水陸移行帯の現状	◎課題の整理及び目標設定の考え方	◎必要な調査計画・方針等の検討 ◎改善策の検討	◎改善策の効果の把握方法の検討	
関連する動き			◇中間報告	◇随時中間報告		